

温故知新、不易と流行

校 長 細江 幸次

一日のどこかで各学級の授業の様子を参観することが日課となっています。この時期になると、どの学年も学習内容が終末を迎え、まとめの練習のようなものも多くなっています。今年度は感染対策による休校もなく、また気象警報発表による臨時休校も少なかったので、余裕をもって各学年とも学習内容を終えることができそうです。それぞれの学級の授業の様子を見ていると一年前のそれと明らかに違うのは、やはり情報端末(タブレット)を用いた学習活動が多く見られるということです。

子どもたちはこの一年間で見事にこの道具を使いこなすようになってきています。自分の見つけたことや書いたことを撮影して、データとして残していくことはもちろんのこと、その中に簡単な説明コメントを入れたり、そのデータを学級内で共有して発表に役立てたりすることは、もう当たり前のように行っています。現在、学習のまとめとして行っている練習問題もタブレットの学習アプリを活用して、数多くの問題にあたるできるようになっています。また、即座に正誤を判定してくれるので非常に効率的です。今、活用しているアプリのすごいと感じているのは手書き入力も認識して、きちんと正誤判定をしてくれるところなんです。そのため、活用の幅は計算練習だけでなく、漢字の読み書きまで広がっています。しかし、その様子をよく見ていると、多くの子どもは速さを追求するあまりに、入力している文字はかなり乱雑になっているということです。

30数年前、私が初任で赴任した小学校は国語の研究をしていたこともあり、20分休み前に行う常時活動に「視写」という活動が位置づいていました。この活動は一定の時間内でどれだけ「正確に」「丁寧に(美しく)」「たくさん」書くかということをやねらいとして、主に国語の教科書で扱われている物語文や説明文を書き写してました。高学年になると、この活動の発展として、担任が音読する物語文等を聞きとって書くという「聴写」も行っていました。家庭学習でも視写(子どもたちの間では「本写し」と言っていました)が、宿題のひとつとして出されていました。私も先輩の先生方のやり方を真似て常時活動や家庭学習を同じようにやっていたのですが、一体どれくらいの効果があるかについてはよくわかっていませんでした。

この頃では「視写」という言葉さえ死語になりかかっているような気がしますが、私は教務主任や教頭となって書写の時間を多く受け持つようになり、改めてこの「視写」という活動を意図的に行うようになりました。書写の学年のまとめとして、教科書の巻末にある「〇年生で学習した漢字」の視写を初任の頃にやっていた方法でよく行っていました。これまでの多くの子どもたちは嫌がらず、真面目に取り組んでいたように感じます。しかし、結果は惨憺(さんたん)たるにもなる子が多かったです。教科書を見ながら、できるところまででよいという約束で取り組んだにもかかわらず、誤字のオンパレード。一年間、書写で大切にしてきた、「止め・はね・払い」や筆圧などいつの間にか意識の外に。そして、根気が続かず、すぐに乱雑になってしまう子もいました。この様子から、以前日常的に行っていた視写のことを思い出し、取組の意義が何となく見えてきたように感じます。

現在、学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が掲げられ、様々な新しい取組が進められています。しかし、何もかもが新しくなるのではなく、以前から行ってきた教育活動とのバランスを図りながら進めていくことが大切だと考えています。特に「書くこと」については私たち大人も含めて、その機会が以前に比べて格段に少なくなっています。意図的、意識的に行っていかなければいけないと思っています。



二者択一ではなく両者融合で

